



Japanese Association of Science & Technology Journalists

JASTJ NEWS

感謝から豊かな調和へ

舘野佐保

忘れもしない、2002年の春。仙台にある母校の大学院農学研究科で卒業をひかえた私は、修士論文審査の最終面接を受けていた。会場の教室に入ると学部の教授陣がずらり。「この3月に修士号を取得したら、就職か進学か、どちらですか」という質問に対し、当時、生体分子機能学講座の教授だった指導教官は、合いの手を入れてくれた。「これから実現できるかわからないが、自分ではこう希望していると、目標を言ってみてください」。

そこで、こう答えた。「留学をして欧米の科学技術ジャーナリズムや執筆を学び、将来それにつながる仕事をしていきたい」と。予想外の回答に教授陣はどよめいたが、静かに応援してくれる雰囲気の中面接は無事合格。卒業して翌月に留学先の米国ミシガン州まで辿り着いた時、指導教官の優しさに感謝の想いがあふれた。

思い起こすと、街で本屋さんが主催する「作家による新刊出版記念の朗読会」に足しげく通っていた。「Uncertain World, Uncertain Science」(ケンブリッジ大学出版)を当時上梓したミシガン大学のヘンリー・ポロック教授のイベントで「科学や技術について書く仕事で、たいせつなことは何ですか?」と尋ねたら、「Be open minded」(偏見や思い込みにとらわれず、常に相手の話をしっかりとよく聞き、見るというスタンスで取材をするべき)と答えてくれた。このシーンはとても記憶に残っている。

ニコラス・スパークス氏の朗読会後のサイン会では、「I would like to be a writer in future!」と伝えてみた。ほぼ間違いなく「大変だからやめなよ。食って行けな

いし」と言われるかと思いきや、ニコラスさんは「ああ、そうなの? どんなジャンル? ノンフィクション? それとも小説? 頑張ってるね。ほくのウェブサイトへ行けば、物書きを目指している人のためにページを設けているから、訪れてごらん」と、笑顔。びくびくしながらも本気の心を打ち明けた私に、具体的に夢を叶える方法をさりげなく教えてくれたのだ。

実は、ニコラスさんは体操選手の夢をあきらめた「どん底」から這い上がり小説家になった。今では日本でも「メッセージ・イン・ア・ボトル」や「きみに読む物語」などの小説が翻訳され、映画化もされてヒットを飛ばし続けている。才能だの運だのと言われても、やはり素朴な努力のひたむきさとガッツが大きな実を結んだに違いない。海外でもほんの一握りのサクセスストーリーの持ち主である。

ニコラスさんの原著をばらばらとめくると、謝辞の内容が詳細にわたっていて、読んでいて微笑んでしまう。好みはあるはずだが、温かな人間性が伝わってくる文章だ。謝辞は欧米では本の最初にあり、そこが日本の本と違う。「なぜ?」を考えてみれば、感謝の想いへの美意識を国際比較できそうで、味わい深い。

世の中の形相が目まぐるしく変化を続けるなか、科学技術ジャーナリスト会議は来年で20周年を迎える。私は修士論文の面接から早10年以上が経ち、今は日本で執筆業を営んでいる。この春からJASTJ理事にも就かせていただいた。見守ってくれる周囲の人々や両親にまずは感謝。そこから私たちの足場を固め、地球上のコミュニケーションにより良き平和なハーモニーを響かせ続けたい。(JASTJ理事)

CONTENTS

巻頭言	1
報告 科学ジャーナリスト世界会議	2
成熟都市での成熟した世界会議/次期会議はソウル/セッション報告「原子力報道」「リスク認識の心理学」/世界会議に参加して/充実したソーシャルプログラム/エストニアツアー	
例会報告(6月) Liイオン電池と日本	6

見学会リポート 国立科学博物館特別展「深海」	7
会員日より ドキュメント「いのち」を見て	8
会員日より オーロラ生中継から見たもの	9
理事会報告 科学ジャーナリスト塾10月開講へ	10
WEB編集長から	10
賛助会員一覧	11
事務局日より	12

成熟都市での成熟した世界会議 ヘルシンキで開催

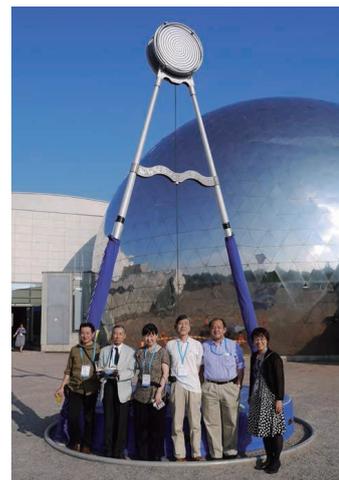
第8回科学ジャーナリスト世界会議が6月24日から5日間、フィンランドのヘルシンキ大学で開かれた。1992年に東京で第1回が開かれてからハンガリー、ブラジル、カナダ、オーストラリア、英国、カタールとめぐった世界会議が、会員1000人以上という世界でも屈指の強力な協会を有するフィンランドにやってきた。成熟都市ヘルシンキの街の快適さも相まって、今回は「成熟」をひとしお感じさせる世界会議となった。

77カ国から約800人が参加

世界会議の主催者はフィンランド科学エディター・ジャーナリスト協会と世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）で、ヘルシンキ市、ヘルシンキ大学、フィンランド文部科学省、カタール財団、ジョンソン&ジョンソン・イノベーション、サンパウロ研究財団などが協賛した。77カ国から約800人が参加した。ロンドン会議が70カ国から1000人、カタール会議が90カ国から720人だったので、参加者数も安定してきたと言っていいだろう。ちなみに東京会議は31カ国から165人だった。



フィンランドの民族舞踊など心温まる演出で始まった世界会議。ヘルシンキ大学の大讲堂で開かれた開会式で
(撮影 瀧澤美奈子)



JASTJからの参加者一同で記念写真 (提供 高橋真理子)

実行委員会は1年以上前から「どんな会議を望んでいるか」と各国協会に希望を聞き、議論を重ねて全体テーマを「科学ジャーナリズム－社会の中の批判的問いかけ (Science Journalism ? Critical Questioning in the Public Sphere)」と決定した。1日ごとの共通テーマを「我々の共通の価値」「我々のワクワクする仕事」「我々の壊れやすい世界」とし、9つの全体セッションと46の分科会を設定した。こうしたプロセスを経て、「ジャーナリストのためのジャーナリストによる会議」を感じさせる内容になったのだと思う。

セッション報告①

原子力報道の落とし穴

私が参加したセッションのテーマは「原子炉の爆発と気候変動の時代における原子力報道の落とし穴」。東京電力福島第一原発事故が発生から2年以上たったいまも復旧のめどがたたず、多くの人々が放射線への不安を感じながら暮らしていること、多くの人々が「原発をやめたい」と思っていること、その一方で昨年末に誕生した安倍政権は日本を再び「原発依存社会」に引き戻そうとしていることなど、日本の混沌とした状況を報告した。

福島現状を知ってもらう

そのうえで、ジャーナリストが留意すべきこととして「とくに放射線の影響を報じる際は、慎重にことばを選ぶことが重要だ」と強調した。たとえば福島県の子どもの健康影響調査でみつかった甲状腺がんの発生割合は、他県の先行調査の約4倍だ。科学的に優位な差ではないと説明されているが、そうだと断定できるほどの科学的知見もない。福島県では

いまも15万人以上が避難生活を強いられ、放射線への不安は深刻だ。こうした状況では、ことばを吟味し、わからないことはわからないと報じることが重要なのだ。

福島第一原発事故を経ても、日本のエネルギー政策は政治的不作為によって、青写真さえ現実には存在しない。こうした現状を、まずは知ってもらうことに努めた。

ほかのパネリストの報告では、フィンランドのライリ・レイノ氏が同国に建設中のEPR（欧州加圧水型炉）の現状に触れたなかで、建設費が82億ユーロに高騰していることを知り、驚いた。出力160万キロワットの最新鋭原発とはいえ、1兆1000億円である。同国の別のジャーナリストは「安全な原発（EPR）の建設は将来への投資だ」と説明していたが、「もっと安くて安全なエネルギーがあるだろう」と正直、感じた。（JAST会員、朝日新聞東京本社科学医療部長 上田俊英）



原子力報道のセッションでスライドを指さして福島事故の報告をする上田会員
(撮影 高橋真理子)

多様なテーマで討論

全体セッションではスウェーデン・カロリンスカ研究所のハンス・ロスリング教授の講演「事実に基づく世界観——人口、お金、エネルギー」をはじめ「倫理とは何か」「興隆するブログネットワーク」といったパネル討論があり、分科会は医療報道や環境報道のあり方を議論する定番から「全体主義国家における科学ジャーナリズム」や「途上国の科学ジャーナリスト支援」といった、いかにも世界会議らしいものまであった。

JASTJからは、引野肇氏（東京新聞編集委員）と上田俊英氏（朝日新聞科学医療部長）が分科会で講演した。詳細は両氏の報告に譲りたい。

（JASTJ副会長 高橋真理子）

次期世界会議 ソウルに決定

第8回世界会議を主催した世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）の総会は6月26日正午から約2時間、ヘルシンキ大学内の会議室で開催された。総会には世界会議への参加77か国の加盟団体代表者と連盟の理事ら約70人が集まった。

今回の総会で注目すべきは、連盟会長の選出プロ

セスの変更と次期開催国の発表の2点。連盟の会長は、これまで次期大会の開催国の代表が就任することになっていたが、次回の2015年以降は、加盟団体の投票で選ばれた理事が会長を互選する方法が導入されることになった。現在の会員1人当たり2ドルという連盟の登録参加費を、来年1月から3倍に上げる提案も協議されたが、継続審議となった。

最大の関心事は次回2015年の開催国選出で、これはケニア、南アフリカ、韓国の3候補の中から理事会で議決され、最終的に韓国が選ばれた。

韓国科学ジャーナリスト会議のチュル・ジュン・キム代表は、総会の最後にフィンランド大会のニーニカンガス会長からこの決定が伝えられると、「心の底から感謝する。必ず素晴らしい国際会議にしてみせる」と決意を語った。

韓国は約30人の代表団を投入、会場で2015年ソウル開催のパンフレットまで配布する熱の入れようだっただけに、開催決定に安堵の表情を見せていた。

（JASTJ会長 小出重幸）



各加盟団体の代表が集まった総会での議論風景
（撮影 高橋真理子）

セッション報告②

リスクをどう報道するか

食品添加物、農薬、遺伝子組み換え食品、医薬品の副作用、低線量被曝、BSL-4実験室、地球温暖化——世の中で絶対に安全なものなどない。「水」ですら10リットルも一気に飲むと死ぬ。大切なことは、リスクとベネフィットのバランスである。先進国を中心にリスクばかり強調する報道の弊害が指摘されており、この問題は世界会議でもさまざまな形で取り上げられた。

過剰反応と政策選択

私が参加したセッションのタイトルは「リスク認識の心理学」で、発表者は私とハーバード大学講師のデイビッド・ロベイク氏の二人。

私は、東日本大震災の半年後に岩手県陸前高田市の松を京都の五山送り火で薪として燃やす計画が「放射性物質を拡散する」という地域住民の反対で中止になったことなどを例にとり、日本でもリスクに対する過剰反応が種々の社会的障害を引き起こし

ている現状を報告した。

一方、ロベイク氏は「国民の放射線に対する過剰な恐怖が原子力エネルギーの生産コストを大きく押し上げ、その結果として、他のどのエネルギーの生産コストより高くなった。それとともに、個人の心理的なストレスを増加させ、誤った政策選択にもつながっている」と発表した。

過剰に恐れる人に、科学的データをいくら示しても納得してもらうことは難しい。さらには、完全に現代科学を否定する人たちが米国などの先進国にも数多くいる。たとえば、聖書を絶対視して進化論を否定する人たちは、頭から現代生物学を否定している。この問題は「世界の進化論と反科学運動を取材して」というセッションで議論された。科学ジャーナリズムは文化、習慣、宗教と独立して存在することはできないのである。（JASTJ理事 引野肇）



「リスク認識の心理学」セッションで放射能問題を発表する引野理事
（撮影 高橋真理子）

世界会議に参加して① 忘れられない議論と出会い

今回初めて参加した科学ジャーナリスト世界会議。この4日間は私にとって、興奮に満ちたものであり、一生忘れられないものとなった。

第一に、これまでほとんど意識したことのなかった、海外で活躍する科学ジャーナリストたちを目の当たりにしたことである。ヘルシンキ大学の円形の大講堂に世界77カ国から集まった807人は、肌の色も言葉も年齢もさまざまだった。しかし「科学の世界と社会をつなぐ」という共通の意識をもっており、いったん議論が始まれば、それぞれのお国なまりの英語でつばを飛ばさんばかりに熱く議論を交わした。

第二に、そこで見聞きした内容が興味深かった。大部分は国の違いを超えて共通した話題が論じられた。たとえば、科学ジャーナリストとして社会的に中立的な立場でありながら、研究機関や企業から広報の仕事依頼された場合、どのように振る舞うか、あるいはインターネット上の新しいコミュニケーションツールをどう生かすか、といった議論などがあった。一方で、政府と宗教、科学の間の難しい関係をうかがわせる話題もあった。たとえばカナダでは、にわかには信じがたいが、政府の研究機関に属する

科学者がジャーナリストに情報開示することを、政府が規制しているという。

そして、第三に、これが今回の一番の成果だと思うが、新たな友人との出会いがあった。昼食やセッションの合間、ソーシャルプログラム

のなかで、感じの良さそうな人々に私は努めて声をかけて、名刺を交換した。どこでどんな仕事をしているのか、どんな暮らしをしているのか。何人かとは、その後、フェイスブックを通じて、お互いに近況を確認し合っている。

夏至のすぐ後のフィンランドは、夜も日が沈むことはなく、カーテンの端から部屋に差しこむ光のなかで、毎日眠りの浅い朝を迎えた。それもまた、楽しい思い出である。(JASTJ理事 瀧澤美奈子)



人気のあるセッションは満席で、参加者は熱心に議論に加わっていた (撮影 瀧澤美奈子)

世界会議に参加して② 科学ジャーナリズムの敵はだれ?

今回の科学ジャーナリスト世界会議では、「科学にとっての善、科学ジャーナリズムにとっての悪?」との刺激的な副題が付いたセッションを中心に、あちらこちらでサイエンス・メディア・センター(SMC)についての議論が交わされた(筆者も関与するSMCについては、JASTJ会報53、57、59、60号を参照)。

この背景には、英語圏における一部ジャーナリストの極端なSMC依存がある。SMCは社会の科学的問題に際して専門家のコメントを収集し、素材としてジャーナリストに提供することで、報道の質的向上を図っている。しかし、取材や検証を通じて丁寧に科学の議論を追うゆとりが無いジャーナリストが、SMCが伝える議論をそのままニュースとして報じてしまっているのである。

しかし、これはSMCというよりも、ジャーナリ

ズムという営みそのものが直面している問題だと言える。もともと科学ジャーナリズムの領域では、被取材者である科学者とジャーナリストの間に科学知識に対する不均衡が存在するため、ともすれば「発表報道」に陥ることが問題となってきた。ところが科学に限らず、今や世界に流通するニュースの大半(8割以上とも)は、公的機関や企業による一次情報にわずかな加工を加えたものに過ぎない。SMCを巡る議論は、総体として「発表報道」に形骸化しつつあるジャーナリズムの危機的状況を反映したものとと言えるだろう。

もともとSMCは、ますます複雑化していく科学コミュニティ内部の議論状況を把握しやすくするために設置された。しかし自律したジャーナリストは、SMCの提供する情報の利便性を活用しつつも、それを懐疑的な視点から検証したうえで報道する責任を持つ。ジャーナリストには激変する情報環境に適応しつつも、原点回帰が求められている。

(JASTJ会員 田中幹人)

充実していた ソーシャルプログラム

今回の世界会議は、開会式、分科会、討論セッションとも充実していたが、特に評価が高かったのは「ソーシャルプログラム」と呼ばれるイベントだった。主なプログラムが終了した夜や日中の時間に、「ヘルシンキ市内自転車ツアー+サウナ」「砕氷船の夏の仕事は?」「市内オリエンテーリング」などの企画が用意され、事前登録で満員になるほど人気だった。人気が高かった2つのツアーを紹介する。

フィンランド最古の天文台ツアー

会場のヘルシンキ大学から徒歩10分の丘の上にある天文台。1834年に建てられ、今も天文教育のために使われている。入り口で30人余の参加者にリキュールがふるまわれ、同国が参加している欧州宇宙機関（ESA）の彗星探査計画について1時間のレクチャー。中庭で食事とワインをいただき、天文台内へ。歴代の望遠鏡、観測施設など、古い施設にもか

かわらずピカピカに磨き上げられて心地よかった。終了は真夜中だったが、北緯60度では11時でも薄明るい。市電が終電を過ぎていたため、ホテルまで歩いて帰った。

冷戦時代を学ぶ市電ツアー

午前11時と午後2時半から、路面を走る市電を貸し切りにして市内を一周する一時間の観光ツアー。ヘルシンキ大の学生が務める約20人のツアーガイドは、冷戦時代の権力を誇示する制服姿に扮して同乗。横柄な態度で乗車券や身分証明書の提示を求め、怪しいそぶりをすると身分証を取り上げるなど、市民弾圧で息の詰まりそうな日常を、車内で再現してくれた。ツアーの最後にみんなで、懐かしい冷戦時代のヒット曲、メリー・ホプキンの「Those were the days（悲しき天使・1968年）」を合唱した。

また、終了後の28日から展開された「会議後ツアー」も人気で、特にヘルシンキから往復2日間の「エストニア科学技術ツアー」が充実していた。小島あゆみさんが報告する。（JASTJ会長 小出重幸）

印象深かった エストニア科学技術ツアー

世界会議終了翌日の6月28日から1泊2日で実施された「エストニア科学技術ツアー」に参加した各国のジャーナリストは約20人。日本からは小出重幸さんと私が参加した。エストニア科学ジャーナリスト協会会長のエネットさんが中心になって多彩な研究紹介や施設見学を企画、発表者の男女比にも心を砕いてくれた。ツアーは欧州地域開発基金（ERDF）の支援で実施され、参加者は無料で楽しめた。

首都タリンで見た先進技術

初日はヘルシンキ港からフェリーで2時間弱のエストニア共和国の首都タリンへ。世界遺産にも指定されている美しい都市だ。旧市街を散歩した後、エストニア科学アカデミーやタリン工科大学（TUT）を訪問。粒子状の半導体材料や魚型ロボット、廃棄物から洋服などより価値の高い製品を作るアップサイクルなどの発表を聞いた。

TUT出身者が開発したインターネット電話として知られるスカイプの開発拠点も見学、研究者の話や建物内部のインテリアからはクリエイティブで自由な雰囲気が感じられた。ここでは世界最先端のデ

ジタル政府を目指す「e-エストニア」の説明があったが、国民一人一人がID番号で税も医療も投票もデジタル管理されていることに驚いた。

2日目の訪問先タルトゥは人口約3万人のうち約2万人が学生という大学の街。タルトゥ大学などでバイオバンクや炭素素材グラフェンの研究、マウスや牛に特殊なペプチドを作らせる研究などについて、またタルトゥ大学の古い天文台では太陽風を受けて航行するエストニア初の人工衛星打ち上げなどの話を聞いた。

このツアーを通じ、エストニアは科学技術のレベルが高く、今後ますます伸びていく国だと感じた。タルトゥ市内での文部科学大臣や研究者とのランチなど食事もおいしく、移動や宿泊も含めてツアーの運営が非常にスムーズであったのも印象深い。2年後に韓国で開催する世界会議の際にこのようなツアーを日本で実施すれば、日本の科学技術や良さをアピールできるのではないかと思う。

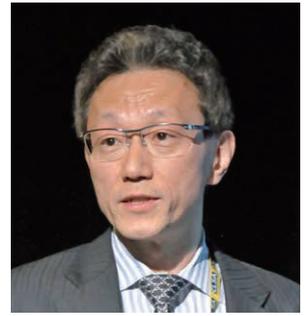
（フリーライター 小島あゆみ）



タリン大学の物質科学研究室で話を聞く参加者たち（撮影 小出重幸）

Liイオン電池に見る日本の凋落と復活

日韓両国で開発に携わった佐藤登氏に聞く



佐藤登・名古屋大学客員教授
(提供 佐藤登)

6月19日の例会では、名古屋大学の佐藤登客員教授を招き「Liイオン電池に見る日本の凋落と復活シナリオ」をテーマに話を聞いた。元ホンダの技術者だが、韓国のサムスンに引き抜かれてバッテリーや太陽電池などを製造するサムスンSDI社の常務取締役も務めた経歴を持つ佐藤さんは、リチウムイオン電池を通して日本のもの作りの状況を見つめてきた。

サムスンの実体

サムスンにはグループ横断の基礎研究機能として「サムスン総合技術院」がある。サイエンスやネイチャーに論文掲載される基礎研究をベースにしているが、「事業につながるアウトプットとしての研究成果はあまりない」という。佐藤さんはサムスングループの中核のひとつであるサムスンSDIの中央研究所に5年間、その後の3年4カ月は本社の経営戦略部門に在籍した。

サムスンで強く感じたのは、マーケットへの“最適化”を事業の目標にしていることだという。事業が難しくなれば短期間で変えていく。当然、その事業が立ち行かなくなれば担当しているグループ企業の社長や役員は更迭される。

佐藤さんが移籍した当初は、日本の材料メーカーがサンプルの営業に来て、義理を果たさないという悪いビジネスマナーがあった。これを経営課題にし「サンプルが来たらきちんとフィードバックして材料メーカーとの提携を見直すようにした」と話す。

サムスンが躍進した背景には、総合競争力の拡大がある。性能や安全性、コストを重視するのはもとより、マーケティング力や顧客信頼度を高め、グロ

ーバル市場を開拓する。「グループ企業のCEO（最高経営責任者）同士、役員同士、実務者同士と

いったレイヤー間で協議を行う。マーケティング活動を通じて顧客ニーズを吸い上げ、最適な電池を開発する。この点は日本企業より積極的だ」と話す。

ホンダにいた時は車載用のリチウムイオン電池の開発にも着手した。ところが、経営会議でリチウムイオン電池は競争が激しいので、どこも本格開発していないキャパシタを優先すべきとの声が挙がり、雲行きが怪しくなったという。

同じ電力貯蔵でも、キャパシタは材料表面の電荷エネルギーしか利用できない。他方、リチウムイオン電池は粒子の中まで三次元的に利用する。「二次元の反応は三次元を超えられない」と経営陣に訴えたが、「それをやるのが研究だ」と強引に押し切られた。

悩んでいたときにサムスンから「電池事業を拡大したい。エネルギー技術全般を取り仕切ってほしい」と声がかかり、職場を変えた。その後、ホンダはキャパシタ事業から撤退、現在はリチウムイオン電池の事業会社をGSユアサと合併で展開している。「先見性がなければ時間が無駄に費やされるだけだ」と佐藤さんはいふ。

電池産業の復興のキーワード

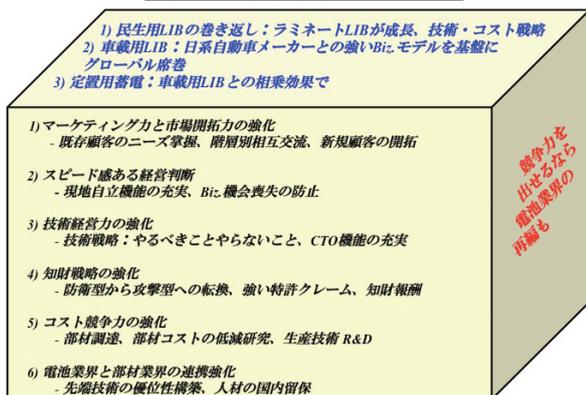
日本の電池産業復活のシナリオとして、①市場開拓力の強化、②スピード感ある経営判断、③技術経営力の強化、④知財戦略の強化、⑤コスト競争力の強化、⑥電池業界と部材業界の連携強化——の6点を訴えた。

ホンダとサムスンという日韓両国の企業の勤務経験を持つ佐藤さんの話を聞いて、日本企業が世界で戦っていくにはスピード感と決断力に長けた韓国企業の長所を真摯に学ぶ必要があると思った。「技術は嘘をつかない」という佐藤さんの言葉には、本質をいかに見るかという技術者の信念が感じられた。

なお、佐藤さんは現在、日経ビジネスオンラインにて「技術経営」という視点で連載している。注目度も高い。

(JASTJ会員 初田竜也)

日本の電池産業復活のシナリオ



佐藤さんが例会報告の中で示した「日本の電池産業復活のシナリオ」

「深海」にすむ驚異の生き物たち 国立科学博物館特別展

東京・上野の国立科学博物館で開催された特別展「深海」の見学会が9月4日に行われた。「科学技術ジャーナリスト賞2013」で優秀賞を受賞したNHKスペシャル「世界初撮影！深海の巨大イカ」で有名になったダイオウイカや深海の驚異の世界をテーマとした内容で、この日の見学会には白川英樹博士夫妻や科学技術振興機構（JST）の相澤益男顧問を含む33名が参加した。

深海は人類に残されたフロンティア

特別展見学に先立ち、本館会議室で館長・林良博さんからの挨拶、理事の折原守さんから国立科学博物館の概要説明があった。1929年に創立した博物館にはすべて自前で収集した標本が414万点ほど登録されているが、海外の著名な博物館に比べると標本数がまだ桁違いに少ないのがこれからの課題だという。続いてコレクションディレクター（CD）の窪寺恒己さん（専門は水産学）から、深海展及びダイオウイカ研究について展示内容の事前解説を受けた。

展示会場に移動すると、「深海の世界とは」、「深海に挑む」、「深海生物図鑑」、「深海に生きる」、「深海への適応」、「深海シアター」、「深海の開発と未来」と7つのテーマに分かれて展示されていて、林館長、窪寺CDから直々に解説を受け約1時間の見学をした。

水深200メートルから1万メートル程までの世界を深海というが、地表で歩けば3時間ほどの距離なのに知られていないことも多い。暗黒・低温・高圧という過酷な環境で生息する不思議な生き物も多く、謎を秘めた世界である。

展示会場のなかでも目を引いたのが、海洋開発研



展示物を前に窪寺コレクションディレクターの説明に聞き入る白川博士と相澤顧問ら
(撮影 山本威一郎)

究機構（JAMSTEC）が世界に誇る有人調査船「しんかい6500」の原寸大模型。2人のパイロットと1人の研究者が海底の調査研究をするというが、身動きも不自由なこんな狭い密室に8時間も閉じ込められるのかと思い、研究者らの苦労が気になった。もうひとつは、全長約3メートルのダイオウイカの標本。その姿に圧倒されたが、巨大なものは全長18メートルもあるという。

シアターのあとは懇親会

特別展を見学した後は、日本で唯一の360度の全地球映像が見られる「シアター 360」を体験した。9月の番組「人類の旅、宇宙137億年の旅」では、アフリカで誕生し、猿人、原人、旧人、そして新人へと進化してきた人類の歴史を、化石やDNAなどから解明されている進化の道筋をたどるという内容。この装置は2005年「愛・地球博」の日本館で人気を博した「地球の部屋」を移設し、シアター 360として生まれ変わったものだ。

最後の立食形式懇親会は、今回の見学会を企画した室山理事（解説委員）の司会進行により行われ、会員同士と博物館の方々との懇親を深めることができた。質問コーナーでは、ダイオウイカに関する普段聞けない内容もあり充実した時間を過ごすことができた。

特別展「深海」は8月21日に入場者が30万人を超えたという。この日も平日の午後とはいえ館内は若い一般見学者も多く、深海について興味を持つ人の多さに感心した1日だった。

(JASTJ理事 山本威一郎)



見学を前に本館会議室で博物館と特別展の概要説明を受ける参加者たち (撮影 山本威一郎)

林監督のドキュメント『いのち』を見て

7月3日、東京・渋谷のアップリンクスで映画『いのち ~from Fukushima to Our Future Generations』が上映された。監督はJASTJ理事の林勝彦さん。NHK時代に多くの番組を手掛けてきた手腕で初のドキュメンタリー映画を作り上げた。福島第一原子力発電所事故以降の経過を追いつけた。被災者の声や現状、専門家や有識者らに取材し放射能の危険性や問題の核心を突く。シーンのほとんどは、林さんが自らカメラを持ち、自ら取材する。

取材や対談のシーンで林さんが「なぜ？」と問う場面が多い。たった2文字の質問に矢のような鋭さを感じた。この問いでインタビューの対象に執拗に迫るのだ。「なぜ？」は理由や根拠を問い、相手の返答を曖昧にしない。日本の現状を考えると、この「なぜ？」という問いの発信が必要に思えてきた。

曖昧さがはびこる日本

今、日本には曖昧さがはびこっている。原発の事故後も危機的な状況にあると警鐘は鳴らされてきた。にもかかわらず、先の参議院選挙の争点は経済成長だった。結果として原発を推進する政党が圧勝した。選挙後にレベル3に相当する汚染水の海洋流出事故が発覚。政府も民衆も未曾有の重大事故に対し感度が鈍くなっていないか。

また、メディアの曖昧さも気になる。ダイオウイカの特集番組などで日本の深海が注目され、日本は資源豊かな海洋国として認識が高まっている。だが一方で、高濃度で大量の放射性物質を海へ垂れ流す。この矛盾をどう捉えるのか。

曖昧な状況は枚挙にいとまがない。これでは解決



満席だった渋谷・アップリンクスの上映会場

(撮影 西野博喜)



上映後、会場からの質問に答える林監督と『いのち』のタイトル映像
(撮影 西野博喜)



を見ないまま問題点が立ち消えになる。取材のシーンのように執拗に「なぜ？」を問わなければならない。事故後も問題は大きく膨らんでいる。理由や根拠を繰り返し問う姿勢が必要だ。

地球上の「いのち」のために

自分の立場は脱原発だ。「なぜ？」と問われれば、答は「科学ジャーナリスト塾」に参加した頃にさかのぼる。科学コミュニケーション能力の養成を目指すこの研修会で、塾長でもある林さんはバイオスフィア（生物圏）の概念に触れた。地球をリンゴの大きさに例えると、リンゴの皮に相当する極めて薄い層がバイオスフィアであり、そこに全ての生命体が生存するという。我々はもろく傷つきやすい環境に生かされているのだ。こんな話を聞くと世界観が変わってくる。地球上の全ての「いのち」のために、生態環境の保全が何よりも優先だ。

映画ではこの思想を垣間見る象徴的な場面がある。浪江町の牧場で、放射性物質で汚染された牛の群れに牧場主が餌を与え続けている。彼は飼育してきた牛を見捨てられないと語った。通常、食肉にできず買い手が無い牛は殺処分されるが、人も牛もバイオスフィアの中で生きている仲間だという視点に立てば、彼の行動に賛同できる。今回の事故が、破壊や殺生を繰り返してきた人間の歴史を見直すきっかけになればと願う。

実は上映前『いのち』という陳腐なタイトルを見てセンスを疑ってしまった。これは制作者の方々に陳謝しなくてはいけない。70分のドキュメンタリーには各々の事実が「いのち」を語っていた。まさしくタイトルどおりの映画であった。

(JASTJ理事 西野博喜)

オーロラ生中継

24時間DIYプロジェクトから見たもの

エキセントリックでグルーブ感（高揚感）溢れるその情景は、無音であることが信じられない。実際は写真作品とは異なり淡い色彩だが、暗闇の中で本の文字が薄っすらと見えるほどの光量を持つ。天球全体に無数の光の矢が降り注ぎ激しく動きまわるオーロラ大爆発だ。1993年、アラスカで見上げた夜空の光景である。エンジニアの卵であった私が、自らの手で（DIY=Do It Yourself）オーロラの生中継をしようという目的を見つけた瞬間でもある。

宇宙放射線や太陽風に囲まれた過酷な宇宙空間の中で、地球磁場や大気のバリアから火花が散る様子がオーロラだ。地球はリアルタイムに戦っている。上層大気が磁力線に沿って輝くため、地球磁場が可視化される自然現象でもある。

オーロラ光の波長分析技術は、惑星大気の組成分析に役立つ。残念ながら成功で終わらなかった火星探査機「のぞみ」にも同様の観測装置が搭載された。

身近な情報との関連がわかったとき、サイエンスへの扉が開かれ、時にはクリエイティビティや技術イノベーションのトリガーにもなる。

異なる米国と国内の反応

オーロラの常時生中継には、照度0.01ルクスほどの暗い光もフルカラーの動画像でとらえられる撮影技術、オーロラ発生頻度が高い地域での安定した観測設備、遠隔制御・中継拠点へのネットワーク伝送網が最低限必要だ。メーカーとの共同開発や、本業のエンジニアリングで技術面は実現することができたが、観測拠点の選定には苦勞した。結果としてビジネスライクな条件交渉で契約が行えたのはアラスカ州立の大学であった。そもそも、日本でのサイエンスコミュニケーションをコンセプトに掲げていたが、当初理解を示したのは米国であった。

最近では、このプロジェクトが周囲から見られる印象は2つの傾向に分かれる。高齢層になるほど、技術面の意義や夢があるプロジェクトとして理解される一方で、事業スキームへの理解は少ない。若年層は、事業スキームへの理解や、サイエンス情報への関心は高いが、技術や時間をかけたイノベーションの準備には関心が少ない。

2000年頃までは、オーロラに対して最近のような



2013年の郡山市ふれあい科学館での全天周オーロラ生中継

(提供 郡山市ふれあい科学館)

狂想はなかったが、当時市場に出始めたデジタルスチルカメラが状況を変えた。撮影とパソコンソフトによる画像レタッチが極めて簡単になり、肉眼視とは異なる、色彩豊かで美しいオーロラ写真がインターネットの普及と共に世の中に広がった。

結果として、自然への畏怖の象徴のような地球極地に現れる自然現象、という印象に合わせて、現地での実体験をしていない人でも狂騒に準じる、不思議な自然現象としてその存在が広がった。

プラネタリウム・ドームや科学館での生中継企画、講演活動は2006年から毎年行っている。2013年に3か月間にわたってロングラン上映した郡山市ふれあい科学館では、満員御礼に合わせて臨時上映回を設けるほどの盛況だった。

生中継にこだわる理由

一方で、広報用の訴求を目的に、肉眼視とは異なる色彩豊かな写真や映像を要望されることが多く、科学館からの依頼も同様だ。学術の現場でこの状況は、危惧せずにはいられない。

今では、「オーロラ」という言葉自体が、時にはこうしたバイアスを生み出す自然現象になっている。

美しい写真や映像はエンターテインメントとしては非常に魅力があるが、私が生中継というリアルタイムや動画像のような本物の姿にこだわる理由の一つは、バイアスに対する策であり、技術開発やコンテンツに施す演出も同様に、実体験や本物を意識するように心がけている。

(JASTJ会員、遊造代表取締役 古賀祐三)

再開「ジャーナリスト塾」10月7日開講

ジャーナリストの仕事に完璧はない。過去の仕事はすべて失敗と言ってもいいくらいだ。もちろん最大限の努力はするものの、一つの仕事が番組や記事の成果としてまとまって世の中に出てしまうと、もっと良い選択ができたのではないかと悔やむ。仮にどんなに周囲の評判がよくても同じで、「恥多き人生」というフレーズが妙に現実感を持って迫ってきたりする。

しかし考えてみれば、それが次につながる原動力なのかもしれない。失敗に学び失敗を繰り返さず、失敗をステップにジャンプするというのだ。

ジャーナリズム環境は大きく変わろうとしている。変わらないのは、ジャーナリストなしに報道は成り立たず、報道の質はジャーナリストしだいという基本だ。

第12回の科学ジャーナリスト塾で「報道の失敗体験に学ぶ」はそんな思いからである。講師は、JASTJ会員で失敗体験の豊かさで卓越した方々に、それぞれ1回ずつ担当してもらうことにした。ただ

単に体験の詳細を伝承するだけではなく、講師と塾生が意見を闘わせ双方で深めるゼミ形式にしたいということから、比較的少人数でスタートする。

◎ ◎ ◎

会場はJASTJ事務局のある東京・白山の富山ビル5階会議室。10月7日から原則として月曜日の夕方6時から2時間、1週間おきに開催する。

1回目は私が担当し、テーマは「核の冬はソ連の謀略?～放送への外圧と自己規制～」。

1984年制作のNHK特集「核戦争後の地球」は、核廃絶を訴えて図らずも世界的な評価を得たが、国会議員を含むグループから「モスクワ放送と同じ内容の番組」など根拠のない非難の外圧に悩まされた。ジャーナリズムに対する外圧は今や常態化しつつある。こうした「失敗体験」をもとに、ジャーナリズムとジャーナリストの在り方を議論したいと思っている。

今からでも申し込み、または途中からの聴講も可。希望者はhello@jastj.jpへ。

(JASTJ理事 小出五郎)

WEB編集長から

これまでも会報などでお知らせしているとおり、世界科学ジャーナリスト連盟(WFSJ)は、アジア諸国の科学ジャーナリスト育成のためにSjCOOP Asiaプロジェクトを行っています。その活動を中心となって支えるのは、日本科学技術ジャーナリスト会議です。

もしかすると、JASTJ会員の中には、WFSJの活動をあまりご存知ない方もおられるかもしれません。今回は、WFSJのWebページをご紹介します。

■ WFSJのサイトにアクセス!

WFSJのサイトは<http://www.wfsj.org/>です。トップページには、世界の科学ジャーナリズムの話題などのニュースが掲載されています。世界のいろいろな地域で科学ジャーナリストが活躍し、ネットワークを形成していることがわかります。

トップページ右側に、“SjCOOP Asia”のバナーが表示されています。ここにアクセスすれば、プロジェクトの概要と、現在の進捗状況を知ることができます。このSjCOOPプロジェクトはアフリカと中近東で行われていたことも、会報などでお知らせしてきましたが、その内容を<http://www.wfsj.org/sjcoop/>でご覧になれます。

こちらはすでにI期とII期を終え、どのような参加者がいたのか、どのような活動をしていたのかも詳しく書かれています。ぜひご覧ください。SjCOOP Asiaとは違ったところもありますが、活動を具体的にイメージすることができますでしょう。

■ オンライン学習の機能も

WFSJのトップページに戻りましょう。右側のバナーに、“Online Course on Science Journalism”があります。ここにアクセスしてみましょう。このページは8か国語で展開されている、科学ジャーナリスト塾のオンライン英語版です。

SjCOOPプロジェクトでの活用のために構築されていますが、だれでもアクセスできます(宿題の答えは確認できませんが…)。このコースは、科学ジャーナリズムについて学ぼうとする人にとって、系統的に解説されている優れた教材でもあります。英語も比較的平易に書かれており、まとまった勉強をしてみたい、という人には最適です。

ぜひJASTJのホームページとともに、WFSJのページもご覧ください。(Web編集長 藤田貢崇)

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2013年9月現在)

TOSHIBA
Leading Innovation >>>

株式会社東芝

おいしさ、そして、いのちへ。
Eat Well, Live Well.
AJINOMOTO®

味の素株式会社



日本電信電話株式会社



鷗友学園女子中学高等学校



ノートルダム清心女子大学 情報理学研究所



花王株式会社



ノバルティス ファーマ株式会社



独立行政法人 科学技術振興機構



株式会社日立製作所



株式会社構造計画研究所



三菱電機株式会社



一般財団法人 新技術振興渡辺記念会



ロート製薬株式会社



宝ホールディングス株式会社

賛助会員募集中

■ 新入会員の自己紹介

● **坪野 吉孝** (早稲田大学大学院政治学研究所ジャーナリズムコース)
 以前は東北大学医学部 (臨床疫学分野) と法学部 (健康政策) の教授でした。現在、精神科の臨床医をしながら、早稲田大学ジャーナリズム大学院客員教授 (健康政策論・健康医療情報論) をしています。

● **本多 宏** (福井大学)
 読売新聞大阪本社では科学部、論説委員、編集委員として医学、環境、原子力などの特集記事、コラムを執筆。科学部時代はCOP3、脳死移植初例、日本人のノーベル賞受賞など。定年退職後、福井大学参与 (広報担当)。

● **土屋 敏之** (日本放送協会 科学・環境番組部)
 「クローズアップ現代」「サイエンスZERO」「きょうの健康」「コズミックフロント」などのディレクターとプロデューサーを20数年、解説委員を兼務。「二足の草鞋」をいかして科学メディアの可能性を模索したい。

● **土屋 礼子** (早稲田大学政治経済学術院)
 メディア史を研究し、ここ数年、ジャーナリズムの戦後史の記録として、聞き取り調査を進めています。科学ジャーナリズムの歴史を学んでいきたいと思っています。

● **江口 あつみ** (サントリーグローバルイノベーションセンター・ビジネス開発部)
 大学は理系出身でサントリーでの社歴30年のうち、前半がR&Dで新規事業企画、情報発信部門、後半は広報・コミュニケーション部門。昨年研究部門に戻り、改めて技術広報活動の重要性、意義を強く感じ、これから推進したいと思っています。

● **西川 迅** (朝日新聞・科学医療部)
 福島第一原発事故や原子力規制・政策を担当。科学報道には2005年から、主に原子力と医療 (感染症) をカバー。もっとウイングを広げたいと感じているほか、海外の科学報道の動向にも関心がある。

● **池口 佳一** (脚本・演出、フリーランス)
 町場の一演出家です。この業界に身を置いて30数年、最近は建設業の安全教育、啓発ものをよく手がけます。とんぼの複眼的視野と蜂の一刺しを求めて参りました。

● **吉田 隆嘉** (本郷赤門前クリニック院長)
 心療内科の医師として過敏性腸症候群や身体表現性障害の治療やカウンセリングを行うとともに、東京理科大学で医工連携の研究に携わっています。サイエンスに関する執筆もするようになり、スキルアップのため入会しました。

退会

堀越俊一 坂田岳史 宮田新平 太田真紀

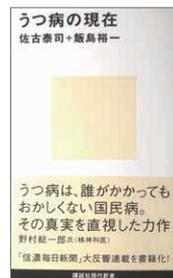
会員の BOOKS

新刊紹介

うつ病の現在

飯島裕一、佐古泰司著 (講談社現代新書・760円+税・6月20日)

現代病の「うつ病」の実像に迫った力作。信濃毎日新聞の記者2人が全国の臨床医や研究者、患者や家族に取材し、連載した記事を一冊にまとめた。混乱気味の診断基準など、医学用語を噛み砕き、素人にも分かりやすく伝えた。いつながら、全国向けの単行本に仕上げる信毎の意欲には感心する。親子ほど年齢が離れた先輩・後輩記者のコンビネーションの良さがよく表れている。うつ病が他人事でないメディア職場にとっても学ぶことの多い書だ。
 (佐藤年緒)



日本の深海 資源と生物のフロンティア

瀧澤美奈子著 (講談社ブルーバックス・800円+税・7月20日)

海は陸から眺めるだけでは一枚の鏡にすぎないが、その下には変化に富んだ豊かな世界がひろがっている。とりわけ日本のまわりの海は深く、水深6000mより深い海域の面積では日本は世界第一位であり、深海大国といっている。なぜ日本の深海にはさまざまな鉱物資源が眠り、多様な深海生物が棲息しているのか。身近でありながら未知の世界である深海を知ることの楽しさを感じてもらえたら嬉しい。全国学校図書館協議会選定図書にも選ばれた。
 (瀧澤美奈子)



クモはなぜ糸をつくるのか? 糸と進化し続けた四億年

Leslie Brunetta、Catherine Craig著
 三井恵津子訳、宮下直監修 (丸善出版・2300円+税・6月30日)

クモは、家の中にも外にも至る所にいる。種類も動物としては3番目に多い。この地球でなぜそんなに繁栄できたのか。クモは糸を巧みに使って生きている。最近の分子生物学や生態学の知見に沿って、クモと糸の4億年の進化の過程をたどるのが本書の肝。読み終わるとクモに親しみが湧くこと間違いなし。クモは苦手という人にも読んでいただけると、とてもうれしい。
 (三井恵津子)



編集後記

▶ 異常なほどの暑い夏もようやく終わると思った9月初め、猛烈な竜巻が埼玉県越谷市と千葉県野田市を襲った。野田にある私の自宅に幸い被害はなかったが、翌日現場を見に行き自宅から1キロも離れていない所に屋根や瓦が飛んだ家がいっつもあったのには驚いた。以前は被害を出すような竜巻が日本で頻繁に起きるとは思いもよらなかったが、竜巻も含めて今年の異常気象を見るとやはり温暖化の影響かと思わざるを得ない。海水温の平均温度が深海を含めて上がっているの、ことは想像する以上に深刻なかもしれない。日本では原発事故の陰に隠れて最近忘れられがちだが、温暖化問題にはいま一度真剣に向き合う必要がある。(靱)

編集・発行

日本科学技術ジャーナリスト会議
 Japanese Association of Science & Technology Journalists (JASTJ)

〒112-0001 東京都文京区白山5-1-3 東京富山会館5F
 電話・FAX: 03-5689-7191 Email: hello@jastj.jp
 会長/小出重幸、事務局長/引野 肇
 編集長/高木靱生 (tyuki7581@yahoo.co.jp)